

---

**【書評】**

木村公一朗編

『東アジアのイノベーション——企業成長を支え、起業を生む〈エコシステム〉』

(作品社、2019年、239ページ、  
本体2,400円＋税)

---

1. はじめに

『東アジアのイノベーション——企業成長を支え、起業を生む〈エコシステム〉』は木村公一朗氏の編著として2019年に出版された書籍である。近年、東アジア経済に関するトピックの中でも関心が高まっているイノベーションや起業、エコシステムの発展が取り上げられ、非常に時宜を得たものである。

本書は全7章とそれを補完する8つのコラムからなっている。それぞれの分野で第一人者として活躍する研究者やジャーナリスト、実業家が執筆している。シンガポールや台湾、中国を事例研究の対象にし、起業を通じたイノベーションを支えるエコシステムのさまざまな側面がどのように発展してきたのか、また、それがスタートアップの成長にどのように貢献してき

たのかを明らかにしている。

## 2. 本書の構成と概要

各章の内容をみていくと、第1章(福岡路氏)「大学の起業家育成—シンガポール国立大学の事例」では、起業活動に対して保守的で、かつ移民起業家を推奨してきたシンガポールにおいて、いかに自国民の起業意欲を高め、また東南アジアのスタートアップ輩出の中核拠点としての地位を確立できたのかという問題に答えようとしている。起業家教育の充実と産学連携の推進を図ったシンガポール国立大学の変革や、工場跡地に起業支援のための「ブロック71」の設立と国際化の試み、政府の役割などを分析し、起業活動の主体である人材(起業家プール)育成の重要性を改めて強調している。

第2章(川上桃子氏)「シリコンバレー志向型政策」の展開—台湾の事例」では、シリコンバレーとのつながりを活用しながらシリコンバレー型のエコシステムを構築しようとしている台湾の取り組みを考察している。2010年代以降、東アジアでは米国のシリコンバレーを参照モデルとして、起業を通じたイノベーションを促進する「シリコンバレー志向型政策」が採られるようになっていく。その代表的な事例として台湾を取り上げ、シリコンバレーの台湾人コミュニティをはじめ、台湾内の文脈、科学技術官僚といったさまざまなアクターの問題意識と働きかけを示し、シリコンバレーからの学習やそのエコシステムとのリンケージ創出を目指す政策の実施展開を解明している。「シリコンバレー志向型の政策の広がり」を理解するうえでは、これを受容した国・地域の個々の文脈と、政策の立案・実施にかかわった関係者の動機を理解する必要がある」と指摘しているところは興味深い。

第3章から第7章では、イノベーションの動向に注目が集まっている中国を分析の対象としている。中国はシリコンバレーをはじめとした外とのつながりを活用しながらそのエコシステムを発展させてきたと指摘する一方、国内のエ

コシステムの充実に焦点を当て、ベンチャーキャピタルやコワーキングスペース、大学の役割、オープンソースやインターネットの活用などの側面から説明している。

具体的には、第3章(丁可氏)「ベンチャーキャピタル—中国の事例」では、ベンチャーキャピタル(VC)が急拡大する背景とその役割を論じている。中国におけるVCの急成長の背景にはローカルファンドの台頭があり、それを支える要因として華人投資家集団の存在や「創業板市場」の創設、「政府引導基金」の導入などが挙げられる。そして、VCの拡大は起業家精神の喚起や起業家の選別を通じてスタートアップの急成長に大きな役割を果たし、インターネット関連のビジネスモデルのイノベーションを後押ししている。一方では、中国のVCは長期間の研究・開発を必要とする事業への投資が不十分という課題も残っている。

第4章(伊藤聖氏)「コワーキングスペース—中国「衆創空間」の事例」では、起業を助け、異なるバックグラウンドを持つ人びとの間のコミュニケーションを加速させようとするコワーキングスペースの取り組みを分析している。コワーキングスペースは、安く利用できる便利なオフィスの提供や、起業家同士の交流を促すイベントの開催、オンライン上のコミュニティ形成などを通じ、起業家の能力向上に貢献し、スタートアップ育成のエコシステムのなかで重要な役割を果たしている。同時に、コワーキングスペースごとにネットワークを促進する力やキーパーソンの実力が異なるため、今後は急増したコワーキングスペースの選別が進む可能性もあると指摘している。

第5章(周少丹氏・林幸秀氏)「大学のスタートアップ支援—中国・清華大学の事例」では、中国のトップ大学でスタートアップ支援に注力している清華大学を事例に取り上げ、起業を通じたイノベーションを生み出すための大学の役割を論じている。清華大学は起業家教育をはじめ、スタートアップの成長段階に応じたさまざまな事業支援を行い、多くの有力企業を生み

出している。また、スタートアップの成長で生み出す収益が大学の発展にも貢献し、スタートアップ支援と大学の進化との間に好循環が生まれていることを明らかにしている。

第6章（高須正和氏）「オープンソースとマスイノベーションメーカー向けハードウェア・スタートアップの事例」では、中国のイノベーション都市である深圳におけるハードウェア・スタートアップの活発な状況を考察している。深圳を中心としたハードウェア事業をはじめめるためのエコシステムを対象に、マスイノベーション（社会的インパクトを与えうる規模の前例のない新サービスをさまざまな新興企業が続々と立ち上げる）時代の到来に伴って、開発方式がどのように変化しているか、また、起業のハードルを引き下げるオープンソース化がどのように広がってきたかを分析している。

第7章（丸川知雄氏）「シェアリング・エコノミー中国の事例」では、ユニコーンを輩出しているシェアリング・エコノミーの分野に注目し、当該分野が起業およびエコシステムとの関係性を分析している。中国の人びとの生活に大きな変化をもたらしたライドシェアを取り上げ、社会課題の解決に事業機会を見いだした起業家の参入やVCの巨額投資、インターネットの活用を促そうとする政策の影響など、急成長が起きた理由を明らかにしたうえで、起業ブームのリスクも指摘している。

この7章のほか、タイのエコシステムの状況

や中国の「政府引導基金」の実態、スタートアップと特許、日本のエコシステムとディープテックなどを説明する8つのコラムが本文を補い、より一層充実した内容構成となっている。

### 3. 本書の意義

昨今、起業活動やイノベーションの創出、ビジネス戦略におけるエコシステムの重要性に対する認識が高まっている。起業を通じたイノベーションを支えるエコシステムについて、事例研究や現地調査を用いて政策支援や大学の役割、VCの拡大などさまざまな側面から分析した点は、本書の大きな貢献であると考えられる。

エコシステムに焦点を当てる本書は最後に、エコシステムの構成要素を「起業する（した）側」と、「起業を支援する側」に分けて言葉を解釈したもの、これらの要素に関する詳しい説明や相互の関係性に関する紹介があればなお良いといえよう。また、編者である木村公一朗氏が指摘するように「本書のテーマは変化が速く、情報そのものの賞味期限は短い」ため、本書で取り上げられた事例からより示唆的なものを抽出し、起業を通じたイノベーションは今後、各国・地域の経済社会にどのような影響を与えるのか、より一歩すすんだ議論展開を期待することとしたい。

趙 瑋琳（チョウ イーリン・伊藤忠総研）